

(様式第1号)

■ 会議録 □ 会議要旨

会議の名称	令和7年度第2回芦屋市福祉のまちづくり委員会
日時	令和8年2月12日(木) 午前10時から正午
場所	芦屋市役所分庁舎2階大会議室
出席者	委員長 藤井 博志 副委員長 松本 明宏 委員 姫野 通子、岡田 雅代、池内 くみ、北村 広美、岩本 仁紀子、 山本 弘美、吉野 哲夫、富久 ちづ子、竹迫 留利子、笠谷 泰宏、 帰山 陽子、山川 尚佳、山田 弥生 欠席委員 浅田 陽一 関係者 第1層生活支援コーディネーター 青木 明日香 第2層生活支援コーディネーター 船寺 恵子、藤本 亮、寺岡 由記、 崎山 真澄、土肥 拓路、北川 望咲
事務局	芦屋市社会福祉協議会 山崎 元輝、三谷 百香、宮平 太、針山 大輔、三芳 学、和田 真砂子 こども福祉部福祉室地域福祉課 岩本 和加子、吉川 里香、堂ノ前 貴洋、亀岡 菜奈、岡本 ちさと、山口 創平
会議の公開	公開
傍聴者数	0人

1 会議次第

(1) 開会

【協議会の成立について】

開始時点で委員16名中15名の出席を確認

(2) 議事

報告

(1) 芦屋市における地域福祉の目標と福祉のまちづくり委員会で協議することについて

(2) 多機関協働推進委員会の報告について

(3) ふんわりビジョンについて

協議

“2030年の芦屋”に大事なものって？Part 2

～孤立している人とのつながり、孤立しない地域づくり～

(3) 閉会

2 提出資料

事前資料1 令和7年度第1回芦屋市福祉のまちづくり委員会グループ別意見まとめ

事前資料2 芦屋市の地域福祉における目標等

事前資料3 「芦屋市多機関協働推進委員会」・「芦屋市福祉のまちづくり委員会」の協議経過等

事前資料4 ふんわりビジョン策定経過報告

事前資料5 今回の協議テーマについて

当日資料1 令和7年度第2回福祉のまちづくり委員会 グループ別名簿

3 審議内容

(事務局 吉川)

ただいまより、令和7年度第2回福祉のまちづくり委員会を開催します。

開会にあたりまして、藤井委員長から一言お願いします。

(藤井委員長)

本委員会は発足から2年が経過し、今回を含めて計4回の議論を行うこととなります。これまでを通じて、福祉の地域づくりに関するコンセプトが徐々に形成されつつあります。本日はその4回目の開催となります。よろしくお願いします。

(事務局 吉川)

ありがとうございます。

ここからの議事進行は、藤井委員長よろしくお願いします。

報 告

(1) 芦屋市における地域福祉の目標と福祉のまちづくり委員会で協議することについて

(事務局 亀岡)

事前資料の1、2、3をご用意ください。

まず、この委員会でどのような話し合いをしてきたのか、振り返りをし、皆さんの意見から見えてきた芦屋市における地域福祉の目標と、この委員会で協議していきたいことについてご説明いたします。

事前資料3の下半分をご覧ください。令和6年度からこの委員会は、より地域づくりを中心にした協議ができるように、協議内容や委員の構成を改編する形で新たに始まりました。年2回の委員会を通して、地域でのつながりづくりや活動がどうすれば広がっていくか等を話し合い、ご意見をいただけてきました。それを受けて、令和7年度第1回の委員会では、意見を深めつつ、次期地域福祉計画に出た意見を取り入れるために、計画期間である5年を目安に、どんな芦屋になってほしいか、2030年の芦屋に、地域福祉の観点から、大事なものって何だろう、というテーマで、グループワークを行いました。そこで出た意見をまとめたものが事前資料1になっております。各グループで、意見交換をした後に、そこで出た意見を基にスローガンを考えました。事前資料1は、そのスローガンを中心において、周りに関連する意見を紐づける形で整理しています。

各グループの意見について説明いたします。Aグループのスローガンは「地域のつながり 日常と非日常の両立」ということで、地域のつながりには、楽しいイベントな

ど非日常的なことも必要だし、一方でイベントが一発で終わらない、日常的につながるための活動の基盤・体制づくり、困ったといえる関係づくりが必要だという話がありました。Bグループのスローガンは「多様性全世代楽しさつまみぐい型双方向コミュニケーション」ということで、日頃から顔の見える関係づくりや多世代多様性を考えたつながりが大切だという話がありました。リーダーや活動の担い手の部分では、それぞれが担える部分だけでもいいし、そもそも地域活動の楽しさを知らないのではないかという話がありました。Cグループのスローガンは「身近な地域でちょっと困ったと言える・助け合える楽しいイベント」ということで、困ったといえる関係づくりや、そのために楽しいイベントや交流で知り合うことが大事という話や、生きがい・やりがいの面で活動者の話がありました。

このように、3グループの意見を整理する中で、共通点として、完全には分類できない部分もありますが、孤立、多世代・多文化共生、リーダーの3つに分けて、背景を色分けしています。薄い黄色の部分が「孤立」、紫色の部分が「多世代・多文化共生」、ピンク色の部分が「リーダー」の意見です。

次に、これまでの委員会でみなさんからいただいた意見から、芦屋市の地域福祉における目標と、この委員会で考えていく方向性を示したものが事前資料2になります。大目標を「孤立しない、させないまちづくり」、中目標を「孤立をなくす」とし、下の図が、地域福祉として目指していきたい構図、理想像になっています。社会とつながれない、生きづらさを抱える社会的孤立の人を少しでも減らすために、地域からの関わり、専門職側からの関わり、また地域と専門職が協働しての関わりを示した図になります。本委員会は、主に地域からの関わり、右側の緑枠の部分に関連しています。孤立している人へ、地域としてどう関わっていけるのか、どんな地域だったらいいのか、考えたときに、3つのつながりが大切だと考えました。

1つ目が、オレンジ枠の部分、好きなことや興味・関心があることで活動している団体のつながり、テーマ型同士のつながりです。テーマ型の団体の例として、こども食堂やおしゃべりサロンが挙げられます。もちろん、個々の活動があつてのことではありますが、活動団体同士がつながることで、悩みや情報の共有が出来たり、コラボして新しい取り組みが生まれたり、小規模グループの、グループとしての孤立の解消が期待できます。

2つ目が、緑の背景の部分、自治会や地区福祉委員会などの地縁型同士のつながりです。地域の関係性をもとに組織されている団体間でつながることで、地域の中で暮らしていくための大切な基盤となります。

3つ目が、水色の背景の部分、地縁型とテーマ型のつながりです。ゆるやかに交差する開かれたテーブルとして、地域の関係性が希薄になっていっている今、テーマ型の団体と地縁型の団体がつながることで、地域の活動が広がり、積み重なっていくことが重要だと考えています。

この3つのつながり、各団体間の横のつながりと、テーマ型と地縁型というこの図でいう縦のつながりを作ることで、孤立している人の様々な思いに寄り添った支援や関わりを持てるのではないかと考えます。加えて、孤立している人の状況に応じて、専門機関と連携することで、孤立する人をなくすことを目指しています。

次に、事前資料2の2枚目をご覧ください。この委員会で考えていきたいことは全部で3つあります。1つ目が赤枠部分、「孤立している人と、テーマ型の活動や地縁型の活動は、どうつながれるか」です。テーマ型は好きなことを主にした活動なので、テーマ型の良さを活かした関わり方がありますし、地縁型にはまさに孤立している人が住んでいる地域基盤としての関わりがあります。それぞれの関わり方で、どうつながるかということです。2つ目が緑枠部分、「孤立している人をめぐって、テーマ型と地縁型は、どう関わっていけるか」です。3つ目が紫枠の部分、「孤立している深刻な人をサポートするために、テーマ型と専門職がどのように連携できるか、また、地縁型と専門職がどのように協働して、受け止めるか」です。これまでの委員会でも、このベースになる部分、各団体間のつながりについて、ご意見をいただいていた。今後はターゲットをより明確に孤立とし、孤立をなくすための、話し合いを展開していきたいと考えています。そこに、皆さんからのご意見を付け加えていくことで、芦屋市が目指す地域福祉の形を共有できればと考えております。

(藤井委員長)

ありがとうございます。お話しいただいた内容は非常に重要ですので、補足しながら改めて説明させていただきます。事前資料1は、皆さんが第1回の委員会で議論された内容を3つのカテゴリーに分けたものです。芦屋市の福祉のまちづくりの福祉とは「孤立」をなくすということです。背景には様々な対策があるものの、まちづくりの目標は「孤立しない・させないまちづくり」です。そこで目指す社会像として、「多世代・多文化共生」があります。そして、そのことを具体的に進めるために必要なのが「リーダー」です。多くの団体が、そのリーダーシップの下でつながっていくことが求められます。この3つの要素に焦点を当てているのが、この資料になります。

次に、事前資料2では「地域の関係性に根ざした中間組織」について触れています。中間組織とは、個人と社会をつなぐ役割を担う組織です。具体的には、地区福祉委員会や自治会、コミュニティスクールなどの地縁型の組織が該当します。しかし、単身化が進んでいる現状では、地縁型の世帯つながりが機能しにくくなり、従来の世帯を基盤としたつながりが難しくなっています。単身社会では、個々のつながりが重要になるため、テーマ型のつながりが増える一方で、地縁型の持つ包括的な支えはテーマ型では難しくなります。したがって、この2つの型の団体がどう連携し、共存していくかが重要になります。これが、青色の背景の部分「ゆるやかに交流する開かれたテーブル」です。

では、次の多機関協働推進委員会について、ご報告をお願いします。

(2) 多機関協働推進委員会の報告について

(事務局 岡本)

芦屋市多機関協働推進委員会についてご報告させていただきます。多機関協働推進委員会は、先ほどの事前資料2の2枚目、紫枠の部分、様々な分野の専門職・専門機関で構成された、多機関による連携や協働推進について考える委員会になります。

事前資料3をご用意ください。今年度は3回実施しており、第1回と2回目に開催された生活困窮者自立支援専門部会につきましては、前回ご報告しておりますので、本日は、右側に記載されている第2回のご報告をさせていただきます。

第2回では、社会参加の推進に焦点を置いて、就労準備支援事業や社会参加推進事業の取組として、就労に向けて課題を抱える方や、家から出ることに困難を感じている方々が社会参加できるようになるための支援を共有しました。また、このような生活困窮者を対象とした支援に加え、精道高齢者生活支援センターの取組についても共有しています。具体的には、認知症を患った方がテニスを続けることが難しくなった場面で、地域の方やボランティアと協力し、テニスを継続できるよう支援した事例が紹介されました。

委員からは、制度の狭間をなくすことの重要性や、さまざまな角度からアプローチすることの重要性、専門職だけでなく地域住民とも協力することの重要性について、ご意見をいただいています。

(藤井委員長)

「孤立をさせない・孤立をなくす」ということは、より積極的に言うと、社会と関わりながら生きていく社会参加につながります。第2回の多機関協働推進委員会では、専門職が、孤立の反対である社会とのつながりをキーワードに議論しました。しかし、支援によって社会とつながることができたとしても、そのつながり先の住民が迎え入れてくれなければ、意味がありません。したがって、福祉のまちづくり委員会と多機関協働推進委員会が連携することが、「孤立しない・させないまちづくり」を実現するために重要になります。

では、次のふんわりビジョンについて、ご報告をお願いします。

(3) ふんわりビジョンについて

(事務局 針山)

ふんわりビジョンについてご報告させていただきます。事前資料4をご用意ください。現行の地域福祉推進計画が2027年3月までになりますので、新しい計画を策定す

る上で、地域福祉を推進していく住民の皆さんの思い、願いを基盤に進めようと考えています。そこで、将来どんな芦屋の地域にしていきたいか、住民の皆さんが思い描いているものを形にするものが、「ふんわりビジョン」です。まず、地区福祉委員の皆さんに、地区福祉委員会の定例会の1時間をお借りして、ワークショップを実施しました。資料には反映していませんが、先日、宮川地区で開催され、現在、全9地区で1回目の開催が終了しています。

資料の右側をご覧ください。ワークショップでの代表的な意見を4つ挙げています。1つ目、「ゆるいつながり」です。縛りがなく、ゆるい雰囲気の方が楽しく、新しい人も入りやすいという意見がありました。2つ目、「世代間交流」です。こどもや子育て世代と高齢者の出会う機会がないという意見が多くありましたので、世代間が交流する場が必要だという話がありました。3つ目が、「気軽に集まれる場所」です。集まれる場所が欲しいという意見が多くありました。4つ目、「自分のためでもある活動」です。委員だけでなくみんなが優しく関わられる地域や、特別な活動がなくても、みんなが担い手になるような地域が理想だという意見が多くありました。

(藤井委員長)

ありがとうございます。少し補足しますと、地区のビジョンを福祉委員だけで考えるということではなく、様々な団体からビジョンがつけられることが理想ですが、まずは、地区福祉委員から地域のビジョンを出してみようということです。芦屋市において、地区福祉委員会は、これまで、高齢者を中心に見守り活動や気にかかけ合いの活動を進めてこられました。孤立しない・させないまちづくりにおいて、地域の中での見守りや気にかかけ合いは、一番のベースになる部分です。まずは、地区福祉委員の皆さんが、どんなビジョンを思い描いているか、発信していくことは有意義なことです。これを中心に、様々な団体から意見を交わせると良いと思います。

また、代表的な意見の4つ目、「自分のためでもある活動」はとても重要な意見です。「自分のため」ということは、地域のためや人のためではなく、自発性から出た言葉になります。これは、今後の地域福祉を考える上で重要になります。

では、次の協議に移ります。

協 議

“2030年の芦屋”に大事なものって？Part 2

～孤立している人とのつながり、孤立しない地域づくり～

(事務局 針山)

事前資料2をご用意ください。今回の協議は、第1回の続きとして、「孤立している人とのつながり、孤立しない地域づくり」に向けて、①リーダーが育つ組織って？②

団体間はどうつながっていったらいい？（活動を一緒に広げよう）の2つの要素を入れて、意見交換をお願いします。

（グループディスカッション）

（事務局 針山）

それでは、各グループのまとめた意見を共有したいと思います。

（Aグループ 藤本）

Aグループでは、リーダー不足に陥らないために必要なことについて話し合いました。3つご紹介します。1つ目、「次の担い手をスカウトすること」です。リーダーに必要な要素を持っている人を見つけた時に、逃さないように声をかけることが重要だという意見がありました。2つ目、「リーダーを引き継ぎやすい環境が整っていること」です。長年活動を続けているリーダーの後を引き継ぐことは非常に大きな負担になります。リーダー像のハードルを下げるのが重要だという意見がありました。また、その方法として、リーダーに負担が集中しないよう、役割分担するという案が出ました。3つ目、「グループに新しい人が入りやすい雰囲気があること」です。高齢者が多い組織では、リーダー候補のみならず活動者も不足しています。特定の世代に偏らず、さまざまな世代の人がグループに属していることが必要だという意見がありました。

次に、団体間はどうつながっていったらよいかについては、愛護委員や福祉推進委員の方から、お互いの地域活動を通じて共通の思いを共有することで、コラボレーションが始まったという話がありました。その事から、活動者がお互いを知り、交流する場が必要だという意見がありました。そのため、集まりやすい場所やマッチングをしてくれる人が必要であり、集まりやすい場所として、JR芦屋駅近くに公共施設が欲しいという意見がありました。

（Bグループ 土肥）

Bグループでは、1つ目のリーダーが育つ組織の話し合いの中で、リーダーが育たない背景として、後継者不足があると考えました。その上で、リーダーが育つ組織を目指すためには、役割や責任を明確化し分担することが必要だという意見がありました。特定の人々の能力や人柄に頼るのではなく、誰でも出来るように役割分担していく必要だと考えました。次に、意見を尊重し合える空気づくりが必要だと考えました。リーダーの意見や思いをメンバーが尊重することも大切ですし、メンバー同士やリーダーがメンバーの意見を尊重することも重要だと考えました。さらに、組織の中に学生を取り入れることが有益だという意見がありました。

2つ目の団体間のつながりについては、団体同士が交流することに加え、活動者が

ボランティアとして、実際に団体間を行き来してみるのはどうだろうかという意見がありました。そのため、団体間のスケジュールや取組を共有しておくことが必要だと考えました。そういう意味では、福祉専門職や関係機関が情報交換できるオープンチャット「ふくちゃ」はとても良い取り組みだと思いますし、こういった気軽に交流できる場や仕組みが欲しいと感じました。また、防災というキーワードは全員に共通することなので、防災でつながると良いという意見がありました。

(Cグループ 寺岡)

Cグループでは、1つ目のリーダーが育つ組織として、リーダーの負担が大きくなりすぎない体制が必要だと考えました。そのために、リーダー像を押しつけないことやグループで役割を分担して支えることが必要だという意見がありました。また、実例として、「助けて」が言えるリーダーがいる組織では、メンバーで助け合い、役割分担がうまくいっているという話がありました。このような事例を、交流会などを通して団体間で共有することが出来ると、団体を超えて、リーダーが育つ環境になると考えました。

次に、リーダーと同時に、サブリーダーも育てることが必要だと考えました。会議や交流会は、リーダーのみの参加が大半なので、サブリーダーの交流会やリーダーに加え、もう1人、2人プラスした交流会を開催すると、リーダーを支える人たちも一緒に育成出来ると考えました。

次に、団体間はどうつながっていったらいいかについては、お互いを知る機会を作ることが大事だという結論に至りました。やっていること、できたらいいことに分けて、話し合ったのですが、やっている活動として、企業・団体が交流や協働する「こえる場!」、地域の活動団体が交流する「つどい場交流会」、中学校区で、地縁型の活動者やテーマ型の活動者、福祉専門職が交流する「縁ノ場」などが挙げられました。こういった取り組みは、お互いの活動内容を知る機会となっており、新しい関係や取り組みが生まれるきっかけとなっているため、今後も続けていきたいという意見がありました。

できたらいいこととしては、「縁ノ場」は中学校区ですが、小学校区や町単位など、より小さい単位で交流する「ミニ縁ノ場」を開催したいという意見がありました。また、イベント時などに「手伝ってほしい」とお願いすると、快く引き受けてくれる人が芦屋市にはいるため、勇気を持ってお願いすることも大切だという意見が出ました。

(藤井委員長)

どのグループも同じことを言っているのではないのでしょうか。それぞれの重複事項を抽出し、まとめることで、何か見えてくると思います。皆さんのご発言の背景には、この20年間ほどで社会構造が激変したことから、従来の組織の作り方とそれを運営

するリーダー像が今では通用しなくなっていることがあります。高度経済成長期には人口が増加し、担い手も多くいました。今は人口が減少していますから、当然リーダーの在り方も変わります。これまでのリーダー像のままでは、誰もやりたくないと思っていることが、皆さんのご意見やアイデアに反映されているのではないのでしょうか。

次に、担い手という言葉についても考える必要があります。ここ20年間の公共施策の中では、行政側が社会に期待する役割を担い手と呼んでいるように思います。自治会長や地域の団体は、自発的というより、社会的責任を持って活動しています。この責任が徐々にしんどくなり、若い人は同じようには出来なくなっている現状にあります。来年、地域福祉計画を立てるときには、担い手という言葉を使うべきか、再検討する必要があります。また、一律に地域に担い手がないと言っても、テーマ型の団体よりも地縁型の団体の方が担い手不足は深刻です。この現状を整理しておく必要があります。また、意見にもあったように、リーダー像を見直すだけではなく、役割を分担する運営を考えていく必要があります。それはつまり、各組織内にサブリーダーがどれだけいるかということです。サブリーダーがリーダーシップを発揮できる運営を構築していかなければなりません。また、担い手感から脱却するためには、興味関心を持つことが必要になります。好きなことに取り組むことで、結果的に社会的な意義を持つような仕組みも考えていかなければなりません。

次に、地域社会についての教育を見直す必要があります。民主主義の中では、自分たちの暮らし・生活をつくるということは、自分のことだけではなく、社会との関連についても考える必要があるということです。ヨーロッパでは、社会に不満があったらデモをなさいなど、こどもの頃から政治を教えています。つまり、社会と関わりながら社会に責任を持つということを教えています。日本は、こういった教育が弱いですし、大人になるにつれ、社会教育が衰退していきます。行政施策の中で、地域づくりのベースとなる教育について振り返る必要があります。

また、孤立についても整理しておく必要があります。孤立している人のつながりづくりと孤立しない地域づくりを考えるうえで、孤立の要素について考えておく必要があります。例えば、若者の孤立は、交流するために、若者のサードプレイスをつくる運営が主流になっています。他にも、障がい者の孤立や高齢者の孤立があります。高齢者の孤立では、特に男性高齢者の孤立が目立ちます。これについては、貧困問題が絡んできます。本日、芦屋市の地域福祉における目標の中で、孤立の話もありましたが、孤立の種類によって、専門職が可能な支援、住民側が可能な支援が違うことがわかるのではないのでしょうか。専門職と住民がどのように協働し、孤立を解消していくかが重要になります。その際、変容する地域側の団体の在り方についても工夫していく必要があります。

最後に、施策的に考えるべきことをまとめます。1つ目、交流するための運営についてです。皆さんからは、プラットフォームを構築し、交流から始めようという意見

が多く示されました。その場合、場のコーディネートは誰がするのか、拠点はどうするのかが課題になります。既存の場でもいいですし、新しい場所でも構いません。この拠点や運営方法について考える必要があります。2つ目、自治施策の中で、こどもや大人をどのように教育するのかについても考える必要があります。このことは、よく議論から欠落しています。福祉教育とは、社会教育をこどもに向けてやっていくということです。福祉教育について考える必要があります。3つ目、先ほど述べた孤立に関する専門職と住民の協働についてです。4つ目、自治施策の実態整理とネットワーク分析についてです。本日はテーマ型と地縁型の整理が示されました。都市部でも郡部でも成功事例は、まちづくり協議会や自治会のリーダーが、住民の自主的な企画提案を促すことで生まれます。「好きな人が好きな企画を立てて」とお願いすると、普段関わりがなかった人々を含め、多くの企画が生まれます。これらの企画を、地縁型の団体が実現に向けて支援をすることで、活動が広がります。このような成功している事例やそのリーダーを発見して、アセスメントしていく必要があります。自治会域、小学校区域、中学校区域、全市的に、それぞれどう表れているのか整理してください。加えて、そうした主体が交流する施策が芦屋市において展開できているのか検証することも求められます。既存の話し合いの場の整理と、現在不足している機能の分析を行うネットワーク分析が重要です。以上のことを、施策を考える上で、検討してください。

(事務局 吉川)

本日は、様々なご意見をいただき、ありがとうございました。

福祉のまちづくり委員会は、第1期ということで、テーマ型と地縁型の方々がどのように連携していくか、地域に関わる方々のご意見を伺いたいという思いで、委員会を編成し、試行錯誤しながら進めてまいりました。これまでの2年間にわたるご意見を通じて、事務局として地域福祉の目指すべき方向が徐々に形づいてきたと感じております。

皆様には、2年間、多大なるご協力をいただき、心より感謝申し上げます。また、次期に関しても、各団体様にお願いをさせていただく予定ですので、引き続きご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

本日は、ありがとうございました。

(藤井委員長)

それでは、これで本日の委員会は終了いたします。

ありがとうございました。

閉会